

2020年度 第18期

事業報告

(事業年度:令和2年4月1日~令和3年3月31日)

2021年6月

特定非営利活動法人クリエイティブサポートレッツ

<2020 年度概要>

2020 年度はコロナ禍で始まり、1 年を通して大いに戸惑う 1 年であった。3 月下旬から 5 月にかけての緊急事態宣言では、障害福祉施設も休業に踏み切ったところも多くあった。そうした中でレッツは 1 日も休むことなく営業を続けた。

障害福祉施設アルス・ノヴァには重度の知的障害者が多く通っている。コロナ禍とはいえ、重度の知的障害のある彼らの生活を変えることは、家庭にとっては死活問題である。またここに通っている精神系の障害の方々にとっても、家に引きこもることは症状を悪化させることにつながりかねない。そうした理由から、換気、消毒、手洗いなどを徹底して、日常の運営はもとよりほとんどのイベント(玄関ライブ、かたりのヴァ、ミドのヴァ、講座など)も中止することなく実施した。

福祉事業における大きな出来事は、ヘルパー事業所 ULTRA を開始したことだ。2019 年から始まった「たけしと生活研究会」から派生して、重度知的障害者の「暮らし方」「生き方」に及ぶ事業が始まった。アルス・ノヴァ設立から 10 年の節目に、障害のある人の日中活動だけではなく生活全般を支える事業に着手したことは感慨深い。

文化事業においては、対面的なイベントが行いにくかった。その代わりに 4 回目を迎えた「雑多な音楽の祭典～スタ☆タン!!」は、完全リモート形式で、全国から公募を行い WEB 上にプラットフォームをつくるなど、新しいやり方が開発された。また「たけしと生活研究会」は全国規模のフォーラムを行う予定であったが、急遽ヒアリング、ZOOM 等での対談に切り替え、本形式の報告書を作成した。これは非常に好評で、全国に広めることにおいてはかえって貢献できたのではないかと思う。「表現未満、」文化祭は規模を縮小して粛々と行った。しかし、毎月行われる「タイムトラベル 100 時間ツアー」は全国からの来訪者が中心であるため、中止の月が多かった。当法人は外部からの来評者も多く、多様な人たちの交流を目的としている事業が多だけに厳しい 1 年であった。

それにしても今までとは違う時代感の中で、法人全体で感染者を一人も出さなかったことに、関係者の皆様のご努力とご協力に感謝申し上げます。

認定 NPO 法人クリエイティブサポートレッツ
理事長 久保田翠

(1)障害者総合支援法に基づく障害福祉サービス事業

■アルス・ノヴァ(連尺町)(生活介護定員 20 名・日中一時支援定員 10 名)

●利用者数の変化

生活介護では18名(1日平均12名)、日中一時支援は土曜日を中心に10名(一日平均5～6名)が利用している。新型コロナウイルス感染症の影響から、他県で緊急事態宣言が発令された時期や、浜松市内で感染が増えている時期に一時的に利用を控える方がおられた。特に日中一時支援の利用者で他事業所と併用で土曜日だけ利用している方が利用を自粛することが多かった。

●新型コロナウイルス感染症対策

前年度末から引き続き、新型コロナウイルス感染症対策を行いながら事業運営を続けた。利用者やスタッフ、来訪者の検温・記録を徹底し、施設の換気・消毒を定時で行なった。一方で、運動不足を防ぐために、公園や神社などの屋外、人混みを避けて、積極的に散歩に出かけた他、インストラクターを招いて週1回の頻度でエアロビクスを実施するようになりました。

●重度障害者支援加算の受給

強度行動障害を有する利用者に対して、強度行動障害支援者養成研修(実践研修)履修者が、支援計画シート等の作成を行う体制を整えて、重度障害者支援加算を受給したことで、支援体制を充実させた。

●支援会議の実施

今年度から毎月第4土曜日を午前中のみの半日営業とし、午後にスタッフ全員で集まって、各利用者の課題の共有や、支援方針の検討を行った。新しいスタッフも増えたので、じっくりと情報共有する時間を確保でき、大変有効であった。

●地域との交流

事業所がある浜松の中心市街地で、散歩や買い物など、積極的に外出を行い、中心市街地に遊びに来ている人や働いている人と交流を図った他、利用者に多様な経験をする機会を提供している。

●学校との交流

前年度から引き続き、佐鳴台小学校、大平台高校、聖隷クリストファー中学校との交流事業を継続して実施しました。新型コロナウイルス感染症対策として、感染拡大が落ち着いた時期に、屋外や運動場、体育館など密にならない広いスペースで交流しました

●他事業所との連携

福祉サービスを活用して、親元を離れて生活を始めた利用者が数名いたため、相談支援事業所やヘルパー事業所、グループホームなどと支援会議や日常の情報共有などで連携する機会が増えました。

●音楽活動

毎月、アルス・ノヴァの利用者が中心に出演する「玄関ライブ」を開催しました。新型コロナウイルス感染防止のため、外部の人向けにはインターネット配信が中心になってしまったが、出演者にとってはライブ出演が音楽活動のモチベーションになった他、出演しない利用者も当日音楽ライブを楽しんだ。演奏の練習も普段の事業所の中で行うので、同じ曲を聴いている内にメンバー外の利用者が関心を持って、演奏を覚え、メンバーに加わることもあった。

●「表現未満、文化祭」の開催

利用者がスタッフと普段楽しんでいる活動を元にイベントを開催し、外部の人に体験してもらい、交流する機会を設けた。音にこだわりのある利用者と音に関するアーティストと一緒に散歩をしたり、普段自己流のメイクなどを楽しんでいる利用者が、コスプレイヤーにメイクをしてもらい、プロのカメラマンに写真撮影してもらったりした。(③表現未満、プロジェクト参照)



■アルス・ノヴァ入野(入野町)(生活介護定員 10 名・就労継続支援 B 型 10 名)

【生活介護】

●利用状況:

実利用者数 11 名、毎日平均7～8名が通所している。

放課後等児童デイサービスから大人のサービス利用に切り替えた方が2名増えた。

●改装

入野の1階にあったカウンターや、使わなくなった物品を思い切って撤去。ロッカーの配置も変えることで、以前よりフロアを広く使えるようになった。玄関口が中からも施錠できるようになり、安全性が高くなっている。

前年度と同様に戸外活動を活発に行い、本人の特性に合わせて「たけぶん連尺」で過ごすメンバーもいたり、建物に縛られないバリエーション豊かな過ごしを心がけている。

●感染症対策

通所時のアルコール消毒、バイタルチェックを利用者だけでなく、職員も同様に行い、記録している。定期的な換気消毒を実施。小まめに消毒出来るように、各職員がアルコールを常時携帯している。

●健康

積極的に散歩やダンスなど、それぞれが楽しみながら出来る運動を細かく行うようにして、病気の予防を心がけている。付き添うスタッフの運動不足解消にもなっている。

入野は趣きのある神社や佐鳴湖など自然が身近にあり、運動と共に季節の変化を体感できるなど、ストレス発散やヒーリングに最適なスポットが沢山あるのが強みである。

通所時の体温測定だけでなく、表情や言動などを見て、体調や心の変化にすぐに気づけるようにしている。気になることがあればその都度記録に残し、適宜職員同士で共有し、ご家族に伝達している。

●講座

引き続き「アートインコミュニティ」や「版画講座」、「アロマ講座」を開催している。

●戸外活動、他者との繋がり

利用者さんの要望だけでなく、新しい体験や興味、才能を引き出したりなどの発展を見据えての屋外活動を心がけている。お買い物の付き添いや、遠方へのドライブ(就労 B の利用者さんも交えたガールズトーク・ドライブも人気)引き続き、近所のコミュニティスペース「夢応援プラザ」さんにも顔を出したりしている。

大平台高校の生徒さんとの交流や、佐鳴台小学校との交流などのイベントにも継続的に参加している。たけぶん連尺や就労 B との連携のヴァ公民館には就労 B の利用者も通っている。落ち着いた雰囲気のある大人の利用者との交流は、お互いにとって良い刺激になっている。連尺で開催される玄関ライブやエアロビなどのイベントに参加したり、本人の特性を活かす事や本人の要望などを考慮して、入野と連尺を行き来して通う方もおり、利用者の可能性を狭めないように柔軟な姿勢で取り組んで行きたい。



【就労継続支援 B 型】

●利用者と居場所

2020 年度は 2 名の方が就労継続支援 B 型(以下、就労 B)のメンバーとして加わった。1 人は家に長期間引きこもっていた対人恐怖症を持つ方。もうひとりグループホームを離れ一人暮らしを始めた未成年の方。どちらも、仕事をするというよりも、まずは家から外に出て施設まで通うことを大きな目標とする方たちだ。2015 年にアルス・ノヴァで就労 B をスタートさせてから、上記のような方の利用や見学が少しずつ増えている。就労につながらない精神・発達障害を持つ方の居場所の数が市内にはまだまだ足りないのが現状だ。

●コロナ禍

就労 B メンバーのほとんどは精神・発達障害のある方だ。新型コロナの见えない恐怖や連日流れ変化する感染拡大の情報に少しずつ不安が膨らみ、行動を制限され、例年に比べ長期間に渡り大きく体調を崩す方が多かった。また、新型コロナ感染拡大の影響で、利用していた居場所が営業時間の短縮や休業となり、また、不安ゆえに家と施設以外の場所に行けなくなる利用者が少なからずいた。

そんな中、アルス・ノヴァは最後の居場所として機能し、作業や表現活動、イベント開催、相談などを通してメンバーたちの不安の発散や気持ちの整理、気分転換をつくっていった。

また、施設を飛び出して施設の周辺エリアにあるフリースペースやカフェにメンバーと定期的に訪れている。そこで、施設ではしない話をしたりお客さんと交流したりすることで、気分転換や他の居場所を利用する機会をつくっている。そのほか、メンバーMTG やライブイベントなどコロナ禍を生きるメンバーたちの状況に応じた新しい取り組みを試みている。

●のヴあてれび

コロナ禍の影響で夏季～秋季にかけて映像制作の外注依頼が相次ぎ、のヴあてれびクルーたち総出で準備・撮影・編集などに力を注いだ。また、イベントやシンポジウムを YouTube や ZOOM で配信する状況となったため、配信業務も増加した。世の中の状況が変化し、配信が身近になっている。今後も配信・発信作業を引き続き力を入れていく予定だ。一方で、コロナの影響や季節的な影響により、秋季

から一部のクルーの体調が崩れるなどしたため、のヴぁてれびの配信ペースを週1回の配信から不定期に改めた。夏季には担当スタッフが変わったこともあり、のヴぁてれびの新しい形を実験的活動を行いながら探っている。

2020年 のヴぁてれびの受注業務

①浜松市役所健康福祉部障害保健福祉課

令和2年度障害者雇用支援セミナー『はじめての障害者雇用』

撮影/編集

<https://youtu.be/aPeHVWj8lw>

②PEG

PEG LIVE #005 ”歌う”ということについて 2020/09/30

ライブ配信/撮影/編集

<https://youtu.be/8Hn6miMpTao>

③浜松キャラバン隊

「知的障害・発達障害のある人のこんな行動あるある」動画シリーズ

撮影/編集

<https://youtu.be/SHb9AVHuwre>

●表現活動

コロナ禍ではあったが、様々な活動を行った。毎月開催の「玄関ライブ」では、精神障害や発達障害のあるメンバーたちがステージにたってバンド演奏、ポエトリーリーディング、漫談などを披露した。いずれも日頃考えていることや抱えている悩み、発散したい欲望などをもとに自分で作詞・作曲をしたオリジナル作品で、それぞれのメンバーたちがアウトプットをしたり、他のメンバーやスタッフと交流する場となっていた。「ムラキングの妄想ラジオ(仮)」では、統合失調症で詩人である村木さんの考えていることや悩み、日々の暮らしなどを赤裸々に発信するラジオで、1年で25回配信した。のヴぁてれびのクルーであり、自身も映像制作をしているSさんは制作した短編映画をYouTubeで発信、国内の映像公募3つに応募した。トマさんは、自身がつくった刺繍作品をInstagramでアップし、毎回好評を得ている。表現は、交流をつくったり、自分の気持ちを吐き出したり、考えるきっかけとなったり様々なきっかけを生んでいる。また、「はたらく」だけではない、それぞれの生き方を見つめる機会となっている。

■訪問介護事業

●アルス・ノヴァ ULTRAについて

2020年9月、障害のある人の「文化的で自立した生活」の実現をサポートすることを目的に、ヘルパー事業所アルス・ノヴァ ULTRA(ウルトラ)を開始した。ULTRAでは、重度の障害のある人の自宅での生活全般や外出時の支援を行う「重度訪問介護」、障害のある人の外出や移動を支援する「行動援護」、「移動支援」を行っている。ULTRAは「文化的で自立した生活」を、障害のある人がご家族などの特定の関係だけに依存するのではなく、多様な関係に開かれながら生活していくことだと考えている。

●開設経緯

レッツでは、2019年から「たけしと生活研究会」(助成 | 福祉医療機構)として、重度知的障害のある人の暮らしの選択肢を増やすための実践と研究のプロジェクトを行ってきた。たけし文化センター連尺町のシェアハウスにて、重度知的障害のある青年たちが、ヘルパーサービスを利用しながら、併設されたゲストハウスに訪れる旅人や一般の同居人との暮らしを実践している。当初、ヘルパーサービスは他の事

業所が提供し、レッツは場所の提供や運営面で生活に関わっていたが、プロジェクトを通して、重度知的障害のある人の暮らしを支えるには、関係者を繋いだり、生活を連続して支援する「コーディネーター」が必要であることが分かった。そういった役割を仕事として持続的に担っていくためにも、レッツとしてヘルパー事業を始めることになった。

●重度訪問介護

現在 ULTRA は、たけし文化センター連尺町のシェアハウスで生活をする3人の方の支援に携わっている。それぞれの方のご家族や、関係する他の事業所とも連携しながら、本人とヘルパーがタッグを組んでその人らしい生活を日々手探りで形作っている。本人が好きなこと・楽しんでいることを出発点に、銭湯やクラブバー、アートセンターなど、街の中に新しい外出先を開拓している。ULTRA は、こうした支援を通して、本人の顔見知りを増やしたりしながら、本人のいるコミュニティをともに育ててゆくことを、生活をサポートするヘルパーの重要な仕事のひとつだと考えている。

●行動援護、移動支援

ULTRA では、障害のある人が多様な関係に開かれた生活を実現できるよう、ヘルパーを利用した外出の機会を提供していきたいと考えている。現在はアルス・ノヴァの利用者の皆さんにヘルパーサービスの説明会を行ったり、アルス・ノヴァの利用者に向けてどんな外出のプランを提案できるのかスタッフたちで検討したりなど、準備をしている。





(2)障害者総合支援法に基づく一般相談支援事業

今年度事業実施なし

(3)障害者総合支援法に基づく特定相談支援事業

今年度事業実施なし

(4)児童福祉法に基づく障害児通所支援事業

■放課後等デイサービス

●事業運営の状況

昨年度に引き続き、新規の利用受け入れはあるが、総数としては減少傾向である。令和3年度に新校「県立浜松みをつくし特別支援学校」が開校することに伴う転校、調整などで、より一層事業継続に必要な利用者数の確保に課題がある。その中で、利用者の確保のため広報活動の見直しなど検討しつつも、子どもたち一人一人の個性を大切にした支援のあり方に即した運営方法を今一度議論し、より良い形を模索する状況にある。

●利用状況

放課後等デイサービスを利用していた生徒が 3 名卒業し、新たに 1 名の利用があったため、2020 年度の実利用者数は 15 名で、毎日平均 6 名程度が通所した。

●活動

今年度は、建物を飛び出して、独自の外遊びや隣接するのづあ公民館を利用したり、室内でも PC で好きな動画を見たり工作に励むことが多く、過ごしの場や遊びも多岐にわたっている。庭遊びでは、新たに園庭と道路の間に可動式の柵を設置し安全の確保ができたため、自由に追いかけて遊んだり、興味のある家電や、近所でいただいた古道具の解体に汗を流したりと児童・スタッフ共々集中して遊ぶことが可能になった。

また、室内や隣ののづあ公民館では PC を利用して興味のある動画や画像を調べて楽しんだり、そこで調べたり印刷したものを使ってスタッフと共に工作に勤しんだり、劇のように物語を作っていくよう

な遊びも起こっていた。新しいスタッフが入ったことによって、それぞれの児童と新しい遊びや過ごし
が生まれている様子が見られた。

また、近年個別支援が強まってきていたが、みんなで自然豊かな公園に行き季節の移ろいや遊具を
楽しんだり、ボール遊びや DVD、PC など興味のある遊びがかぶることも出てきて、時には誰が使う
か何を見るかで争ったり取り合ったりしながらも、譲り合いながら楽しむなどの交流が見られた。



(5) 児童福祉法に基づく障害児相談支援事業

今年度事業実施予定なし

(6)文化センター事業

①「ともに暮らす」事業

1・ゲストハウス、シェアハウス事業

たけし文化センター連尺町3階のゲストハウス(2名)、シェアハウス(4名)の「ニューアート浜松」では、3名の知的障害の方の生活がスタートし、個室の月間利用を行っている。ゲストハウスでは、新型コロナウイルスの影響で滞在者を基本的に受け入れを自粛した。

2・たけしと生活研究会 <助成元:独立行政法人福祉医療機構>

昨年度1名から今年度3名の重度知的障害者が本格的に自立生活の実験に挑んだ。それぞれが複数のヘルパー事業所を利用しながら生活している。

コロナ禍の影響もありゲストハウスの利用が非常に難しく、障害者以外の来訪者が激変した。そのためたけし文化センター1階を開放し、彼らの居場所を作り、市内の方々などが遊びに来れる場所を作った。これを「リビングルームを外に拡張する」といった考え方で行ったが、食住と切り分けることで多くの可能性を見出すことができた。シェアハウスは4部屋しかなく、現在3名でも狭さを感じるようになってきた。そうした意味でもリビングルームを外部に求めることは一つの解となった。

また、障害福祉サービスの制度や、先進事例について、専門家にヒアリングを行った。コロナ禍の影響で先進事例の見学は1か所であった。全国でも先駆的な試みであった重度障害者のマンション型ケアホームの見学と、重度訪問介護サービスの状況をヒアリングした。また厚生労働省の専門官にヒアリングを行い、重度知的障害者の住まいや、生活の在り方、制度についての可能性を研究した。また、9月には当法人自らヘルパー事業所を立ちあげ、自らもヘルパー事業を行いながら、制度等の課題を検討した。

当初予定していたフォーラムがコロナ禍の影響で実現できないことを踏まえ、事業検証シンポジウムを行うことにより、フォーラムと同等の成果を得ることに尽力した。

●シェアハウスでの3名の生活実験の実施

3人の男女が実家と行き来しながら、ヘルパーサービスを利用して、シェアハウスで生活した。新型コロナウイルス感染症拡大を受けて、一時はシェアハウスを閉鎖していたが、感染対策をして、すぐに再開した。3名が複数のヘルパー事業所を利用して生活している。



●ヘルパー事業所 ULTRA の設立

圧倒的なヘルパー事業所不足を解消すること、実際に事業者となり重度知的障害者の生活を支えながら思考することを目的に 9 月には当法人もヘルパー事業所を立ち上げた。

事業内容: 重度訪問介護、行動援護、移動支援

●ゲストハウスの運営

シェアハウスに併設しているゲストハウスに一般の人に宿泊してもらい、重度知的障害者が支援者以外の人間関係を得る機会とする予定だったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で積極的に宿泊客を受け入れることができなかった。しかし、滞在前に感染予防をしてもらうことで 8 月から 1 ヶ月間、広島の新聞記者の女性に滞在してもらい、滞在記をウェブサイトに掲載してもらうことができた。



●たけし文化センターの解放とリビングルームの設置

県外の来訪者を受け入れられない分、市内の人たちと交流するため、たけし文化センター連尺町を夜も解放し、音楽イベントなどを開催した。

また、たけし文化センター連尺町 1 階に「リビングルーム」を設け、生活の場所(寝食)ではない交流スペース(リビングルーム)として、感染対策をしながら交流を行った。

(1)クラブアルスの実施(2021年12月)

(2)トークシリーズの開催(感染対策をしながら (3回))

(3)リビングルーム(たけし文化センター連尺町内、中 2 階を設置。交流スペース)

●宿泊体験の実施

障害のある人たちの宿泊体験やレスパイト利用についても、感染症予防のため、住んでいる人を優先し、積極的に受け入れることができなかったが、家族との関係に悩む発達障害の男性が宿泊体験を行った。

●ヘルパーインタビューの実施

全国でヘルパーとして働く人や事業を行う人にインタビューし、ヘルパーという仕事の魅力と、その多様なあり方を明らかにした。同時に重度訪問介護や重度知的障害者の暮らし方について、制度的な現場における課題などを伺った。

(1)茂木秀之(NPO 法人日常生活支援ネットワーク「パーティ・パーティ」)／オンライン

(2)NPO 法人月と風と／対面

(3)合同会社呼及舎／オンライン

(4)天島大輔(一般社団法人わをん代表理事)／オンライン

(5)槇邦彦／対面

(6)岩橋誠治(たこの木クラブ代表)／オンライン

●ヘルパー事業所 ULTRA の設立

2021 年 9 月よりスタート。事業内容は、重度訪問介護、行動援護、移動支援。スタッフ 3 名、支援者 3 名。当事業所のチーフが重度知的障害者 3 名のコーディネーター的な役割を担うことで課題を

整理していった。

●トークシリーズの開催

重度知的障害者の新しい暮らし方を模索するために、障害に限らず、広く生活に関わる分野の専門家を招いて、公開でレクチャーとディスカッションを行った。特に、シェアハウスでの生活実験から出てきた課題について考えた。

- (1)健康は何のためか？ ゲスト:西川勝(臨床哲学者)／参加者 23 名
- (2)重度障害者の家族が考える自立 ゲスト:坂川智恵(合同会社あゆちゃんち 代表(仮))／参加者 16 名
- (3)食事とケアのきほんのき ゲスト:金丸泰子(作業療法士)／参加者 18 名



●有識者ヒアリングの実施

「重度の知的に障害のある人たちの暮らしを考える」をテーマに、暮らし、自立、制度、共生社会といった視点から各有識者に、ヒアリングを行った。

(1)重度の知的障害者の暮らしの変遷そして未来

- ・「暮らしを支えること～たんぼぼの家の実例から」 播磨靖夫(たんぼぼの家 理事長)
- ・「重度障害者の自立の姿 Part1」 岡部耕典(早稲田大学 文化構想学部教授)
- ・「重度障害者の自立の姿 Part2」 片桐公彦(厚生労働省 社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課 障害福祉専門官)

(2)地域共生と社会

- ・「これからの地域共生」 野澤和弘(植草学園大副学長／毎日新聞客員編集委員)
- ・「障害者・家族・地域・コミュニティ」 猪瀬浩平(明治学院大学 教養教育センター教授)
- ・「これからの障害者の社会的役割」 竹村利通(日本財団)
- ・「地域共生 社会包摂の観点から」 本後健(厚生労働省保健局高齢者医療課長)

●たけしと生活研究会 検証シンポジウム

「たけしと生活研究会」の 2 年間の活動を報告し、福祉制度、まちづくり、地域包括支援、臨床哲学など、さまざまな分野の有識者・実践家からなるアドバイザリーボード委員とともに振り返り、成果や課題を検証するシンポジウムを開催。シンポジウムでは、事業背景の紹介と、2 年間の生活実験、専門家を招いたトークイベント・ヒアリングなどの研究活動報告の後、課題整理とパネルディスカッションを行った。

<アドバイザリーボードメンバー>

堀田聡子(慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科教授)

保井美樹(法政大学現代福祉学部人間福祉研究科教授)

西川勝(臨床哲学者)

片桐公彦(厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課 障害福祉専門官)

小出隆司(浜松市浜松手をつなぐ育成会・静岡県手をつなぐ育成会会長、一般社団法人手をつなぐ育成会連合会副会長)

久保田尚宏(浜松市健康福祉部障害保健福祉課)

飯塚康敬(浜松市中区社会福祉課)

<オブザーバー>

本後健(厚生労働省保険局高齢者医療課長)

高橋久美子(シェアハウス利用者 高橋舞さんの母親)



●報告書の制作

本年度、報告書の制作を充実させた。今年度おこなうことができなかったフォーラムにおいて、議論の中で導き出したいと思っていた重度知的障害者の新しい暮らし方の試行錯誤を、今後補完するための資料作りとしてとらえている。また、本事業を目標としている地域との共生といった観点からも、現在は検証中ではあるがその軌跡を記録していく必要があった。

フォーラムと同等の趣旨で行ったトークシリーズ、ヒアリング、検証シンポジウムや実践を記録に残し、記録集として編集した小冊子を制作し、全国の関係団体に送付した。

●HPの整備

当法人のホームページに昨年度開設した「たけしと生活研究会」の特設ページに、今年度の事業の報告や記事を随時アップした。

- ・滞在者による寄稿
- ・2019年度たけしと生活研究会報告書前ページ掲載
- ・たけしと生活研究会検証シンポジウムのあらましと記事
- ・たけしと生活研究会ヒアリングを終えて
- ・スタッフによる寄稿

②20周年記念本発行事業

2020年にクリエイティブサポートレッツ設立20周年を期すことから、20周年記念本の発行に向けて議論を行った。

前年度の文化庁事業の報告書「ただ、そこにいる人たち」の刊行に携わった編集者の影山裕樹氏と小松理度氏に協力をあおぎ進めているが、2020年中の発行はかなわなかった。

③表現未満、プロジェクト<助成元:静岡県文化プログラム推進委員会/浜松市>

2016年度から始まった「表現未満、」プロジェクトでは5つの事業を輩出し、障害福祉と文化事業が一体となった拠点づくりはその先駆けとなり全国に影響を与えている。2020年は、上記の事業を継続的に行っていくとともに、「表現未満、」の考え方をさらに全国、世界に伝えていく初の実践を試みた。具体的には「雑多な音楽の祭典～スタ☆タン!!」が「スタ☆タン!!Z」プロジェクトとして、いつでもどこでも「スタ☆タン!!」が行えるキット(スタ☆タン!!スターター)を開発。福島・長野・宮崎・松山・大阪といった全国

のパートナー団体の手によってその地域独自の「スタ☆タン!!」が開催された。またスタ☆タン!!スターターは英訳バージョンも制作。海外パートナーであるワシントン大学のジャスティンジェスティンの協力のもと海外展開を行う基盤整備をした。

また、4年間にわたる「表現未満、」プロジェクトの意義や位置づけを検証するため、国内外の4人の研究者によるリサーチ事業を行った。「表現未満、」という概念が立体的に分析・検証されたことで、世界的現代アートの潮流の中にレッツの活動が位置づけられ今後の検証事業の試金石となった。

(1)スタ☆タン!!Z

認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ(以下レッツ)は「～雑多な音楽の祭典～スタ☆タン!!」を過去3回、アートセンターや音楽ホール、文化センターで行なってきたが、今年度は、コロナ禍においてもより全国・全世界に活動を広めるべく、従来のように一極大規模集客型での音楽イベントの開催ではなく、全国各地で大小様々なスタ☆タン!!が行われ日常の表現を再発見できる企画として「スタ☆タン!!Z」プロジェクトを実施した。



誰でも・どこでもスタ☆タン!!ができるキット「スタ☆タン!!スターター」を開発・制作し、全国に配布した。行われたスタ☆タン!!は映像として収集し、新たに企画・構築したウェブ上のプラットフォームサイトに掲載し、表現共有や広報の場とした。

また、「スタ☆タン!!パートナー」として、全国の7つの文化・芸術活動団体にスタ☆タン!!のプロデュース・開催を依頼。福島、大阪釜ヶ崎、愛媛など独自のスタ☆タン!!の場の創出、新たな表現者の発掘など、より全国、全世界に広がる展開を試みた。チラシ、キットは日本語だけでなく英訳版も作成し、多様な言語・表現にアプローチする第一歩とした。

(2)しえんかいぎ

障害福祉の支援の中にある哲学的な問いを関係者ととともに語り合っていく「しえんかいぎ」を行った。毎月第3土曜日午後を会議の日とすることにより、より深い議論ができるようになった。

(3)「GOGO! たけぶん探検隊!」の実施

市内の小学校4年生が授業の一環でたけし文化センターを訪問する本事業は、コロナ禍により開催が危ぶまれたものの、佐鳴台小学校の1校のみ実現がかった。

昨年同様、「これやったシート」と「もくげきシート」にメモしながら館内で1時間弱滞在し、まとめとしてシートの発表し、学校に帰った後に、絵葉書をつくって誰かに送るというプロジェクトをすべて行っていただいた。

この事業を発展させた形で、浜松市市民協働推進課が企画した「シミンキョードー探検隊」でも、同様のプログラムを開催し、6組の親子が参加した。

いっぽう、前年度に開催していた城北小学校については、学年全員での来訪を取りやめ、スタッフによる出張授業を行った。「たけぶん目線で『あゆみ』を作ってみよう」をテーマに、長い時間をかけてせんべいを食べる男性や水を気持ちよさそうに浴びる男性の映像を鑑賞したあと、「誰にも評価されてきてないが自慢できること」などを発表してもらい、友達同士で「あゆみ」(通知表)を作るワークショップを行った。「ごはんを吐くまで食べる」「学校では食べるのに家では食べない」「お母さんに怒

られると眠くなる」など子どもたちの日常にある様々な「表現未満、」な特技が発表され、楽しい授業となった。



(4)たけし文化センター連尺町の文化創造発信事業

●たけし文化センター連尺町

玄関ライブ(月1回)、かたりのヴぁ(月1回)、ミドのヴぁ(月1回)、銅版画教室(月2回)、アートインコミュニティプログラム(月1回)、文化祭でも各種ワークショップを開催した。

●表現未満、文化祭 2020

毎年秋の「表現未満、文化祭」はたけし文化センターの恒例行事として定着してきている。文化祭では、「出会い／体感／対話」を大切に、様々な切り口のイベントを3ヶ月にわたり約50種開催した。

当法人が運営する障害福祉サービス事業所アルス・ノヴァの利用者たちと、彼・彼女らの表現と出会い、体感するイベントを企画・開催した。コロナ禍が続く中での開催であり、一部のイベントは生配信やリモートを活用したが、多様性や表現は直に出会い体感することが最重要と考え、コロナ対策を講じながら本人たちと実際に関わり合いをもつ小規模のイベントを多数開催した。また、小規模のイベントを同日に複数開催することで、参加者の増加とともに方向性が異なるイベントを同時に楽しめるといった相乗効果が生まれた。

ライブやワークショップ、カフェをきっかけに多くの参加者が訪れ、多様な人たちがともに同じ空間・時間を過ごしながらか、関わりや交流が生まれていった。一方、たけし文化センター連尺を会場にしながらか、「まちあるき」といった施設から飛び出して中心市街地を舞台にしたイベントも積極的に行った。

文化祭を通して実際にわかったことは、プライベートな表現を発揮・交流する場、障害を含めた多様性について対話する場の少なさである。文化祭はそうした場や機会を提供・実践することができたことは、今後、この地域性の多様性やソーシャルインクルージョンへとつながっていく可能性がある。

<ライブ「噴火犀 2020」>

音楽の創造都市である浜松市を中心に、音楽活動をするアーティストたちのライブを開催(全4回)。地元アーティストたちとのつながりをつくるとともに、新型コロナの影響で活動機会が激減しているアーティストたちの活動機会を提供することができた。また、障害福祉施設を会場に障害のある人、ない人が混在しながら、演奏したりはちゃめちやな動きをしたり、声を上げたりといった自由に過ごせる音楽空間づくりの実験を行うことができた。

障害のある人も交えた音楽空間は、障害のある人の率直な反応がほとんどの演奏者にとって好印象であった。また、福祉施設を土台とした音楽空間は「偶然性や即興を取り入れた演奏や音楽、音に対する解釈や向き合い方が変わる」といった声が一部の出演者からあり、静かに演奏を聞くのではなく障害のある人が自由にふるまう音楽空間の可能性、そして、その空間から生まれる新しい表現の可能性について思考・対話することができた。

イベントに出演したアーティストからは「はじめて福祉施設でライブをした」「障害のある人の素直な反応が楽しかった」「ステージと客席がまざった空間がおもしろかった」など好反応で、参加者からも、「あまり見かけない空間がおもしろい」「子どもも過ごしやすい」「障害のある方とともに過ごせる場は貴重だ」といった意見があり、多様な方が過ごす音楽空間づくりの経験となった。

<妄想?!劇場 変身編>

ある利用者の「プリキュアになりたい!」という強い思いに端を発して生まれたイベント。日常では行わない行為から、もうひとりの自分を表現し、交流する場をつくった。

外部の福祉施設・福祉団体で行ったコスプレ・ワークショップでは、障害のある人たちが自分の欲望を気兼ねなく思い切り表現できる時間・空間が生まれた。また、関わる支援スタッフからは、「ワークショップの内容が通常の支援とは異なった切り口であり、いつもの支援方法を考え直す気づきがあった」、「参加したメンバーたちがいつもとは違った顔を見せていた」という感想があがった。

一般の方を対象としたコスプレ・ワークショップでは、女装をする方、自分がイメージしたキャラクターになる方など、それぞれが可能性を切り開く姿が見られた。参加者の中には「社会・家族・コミュニティに忖度し、また要請されて『いつもの自分』をつくっているがワークショップを通してなりたい自分を表現できた」、「コロナ禍で閉じた状況の中、思い切り自分を出せて前向きになれた」という声があった。

普段やらないことをやることで、社会でつくられた自分とは異なる別の「わたし」を掘り起こし、生きるうえでの豊かさや思考の多様性をつくる機会となる。生産性が重視され、まだまだ同質的な体制・価値観が多い社会の中に、こうした機会をつくっていくことが文化の役割であることを改めて感じた。

<散歩シリーズ「〇〇さんと歩く」全7回>

「こだわりやクセが強いアルス・ノヴァのメンバーたちと散歩すると、いつもと違った風景や時間が味わえる」をうたい文句に、7回の散歩イベントを開催した。

イベント参加者からは「はじめて障害のある方と街を歩いた」「障害のある方の活動に直に触れることができた」「子どもが障害のある方と接する機会がくれた」といった体験をつくり出すことができた。同時に、様々な人たちが障害のある人やその表現と出会い、体感・交流できた。

<外部の市民団体によるイベント>

市内を中心に活動する外部の市民団体によるイベントやワークショップを開催した。それぞれの団体の活動を市民に発信し、体感・交流する機会をつくった。また、それぞれの団体の参加者が集まり、当法人のイベントにあまり来ない年齢層の参加者(例えば、多くの子どもたちの参加)があり、多様な市民の参加をつくることができた。初めて当法人を訪れる方も多かった。

●のヴァてれび配信

就労継続支援 B 型のクルーによる、文化センター内外の出来事の配信「週刊あるす・のヴァ」は全24回配信され、たけし文化センター連尺町でのライブ配信や地元のアーティストのライブ、たけしと生活研究会のトークイベントなども配信された。チャンネル登録者数は300人を超えた。

(5)観光事業

●タイムトラベル 100 時間ツアー

たけし文化センター連尺町及びのづあ公民館に 1 泊 2 日宿泊する、体験型ツアー、「タイムトラベル 100 時間ツアー」。2020 年度はコロナ禍により、4 月～5 月間は休止。6 月以降は感染症対策を十分に行い、受け入れ地域を限定するなどして、2 回行った。

●かしだしたけし

障害のある人が、外部からの依頼に応じて出張訪問をした。特に佐鳴台小学校の昼休みの時間に訪問する「みにみにアルス・ノヴァ」は、感染防止の観点から、前年度までの教室での滞在ではなく、校庭や体育館での活動になり、活動に変化が生まれた。

【本年度かしだし先】

浜松市立佐鳴台小学校(計5回)、静岡県立大平台高等学校、静岡文化芸術大学



(6)表現未満、リサーチプロジェクト

本事業では国内外の4人の研究者たちに「表現未満、」及びレッツの活動を、各々の研究分野から分析・考察をお願いした。本事業の目的は、2016 年から続いている文化事業「表現未満、」プロジェクトをアカデミックな視点から検証するとともに、20年間にわたる福祉やアートといった分野を横断するレッツの複雑な活動を専門家が紐解くことで、これまでの活動の考察を行うことであった。

<参加研究者>

・長津結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院助教)

言葉を定量的に見つつ、語と語のつながりを複合的にとらえなおすテキストマイニングという手法を用いて、「表現未満、」という概念を立体的に分析した。

・若林朋子(プロジェクト・コーディネーター／立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科特任准教授)
若林が担当する授業を手がかりに、レッツそして「表現未満、」プロジェクトの文化政策上の意義及び文化政策の批判的検討を行った。

・中村美帆(公立大学法人静岡文化芸術大学文化政策学部芸術文化学科准教授)

憲法第 25 条「文化」の概念を手がかりに、文化と生存権、文化と人権という観点から「表現未満、」プロジェクトを考察した。

・ジャスティン・ジェスティ(Justin Jesty)(ワシントン大学アジア言語文学学科准教授)

美学的立場から、異化と枠づけという概念を用いてレッツの活動を、英語圏における障害研究と現代アートの中に位置づけ、その美的価値を論じた。

■2020年度メディア掲載

2020年

- ・4月6日 中日新聞「よそ者目線から障害考える」
- ・5月18日 「たけし、自立生活始めました。～重い知的障害のある人の新しい暮らし～」
NHK 教育 ハートネット TV(全国放送)
- ・6月25日 DIVERSITY IN THE ARTS website 「レポート たけし文化センター」
- ・8月3日 朝日新聞 折々のことば 「色々な人たちがいるっていうことに自分も含まれているんだって
ことに気づけることが大事だよね」(『ただ、そこにいる人たち』から)
- ・8月25日発行「赤ちゃん和妈妈」2020年9月号「社会とつながり、支えあう ヒト・モノ・コト」(久保田寄稿)
- ・9月 浜松 NPO ネットワークセンターニュースレター2020年9月号会員紹介(久保田寄稿)
- ・10月 東京藝大 DOOR プロジェクト書籍化(久保田寄稿)※出版日2021年まで延長
- ・10月22日 中日新聞「浜松大平台高生が施設利用者と交流」
- ・10月30日 SBS ラジオ「上田明子の Going My West」高木・吉田出演
- ・11月5日 TURN ジャーナル AUTUMN2020-ISSUE 05(久保田寄稿)
- ・11月28日 朝日新聞読書欄『ただ、そこにいる人たち』掲載
- ・12月20日 中日新聞「表現の場なくならない 浜松で音楽イベント」
- ・12月23日 中日新聞「福島の作家 障害者との交流を一冊に」
- ・12月12、19日 静岡朝日テレビとびっきりしずおか土曜版「エール・シズオカ・カルチャー」
「表現未満、」プロジェクト・「スタ☆タン！！」
- ・12月14日 DIVERSITY IN THE ARTS website ニュース 雑多な音楽の祭典「スタ☆タン!!Z」
- ・12月25日 グランシップマガジン vol.24「文プロ通信」(表現未満、プロジェクト)
- ・12月25日 障がい者のための情報サイトハーティサロン「ひとりひとりの文化や表現を大切に」動画
(レッツ及び高橋舞さん)<https://plushearty-salon.com/mirai-lets/>

2021年

- ・浜松百選 1月号街ネタ情報局『ただ、そこにいる人たち』書評
- ・不明 創価学会 第三文明 『ただ、そこにいる人たち』書評
- ・1月11日 AERA No.2 増大号書評「現代の知の潮流に棹差す書」
- ・1月14日 静岡新聞(夕刊)「『変身』テーマ 体で表現」
- ・1月29日 中日新聞 おはよう「重度障害者支える 佐々木雄一さん」
- ・1月31日 静岡新聞 ブックエンド「ただ、そこにいる人たち」
- ・2月2日読売新聞文化欄『ただ、そこにいる人たち』書評
- ・2月1日朝日新聞デジタル じんぶん堂「障害、国籍、文化・異なるものを受け入れ、共にある世界へ」紀
伊国屋書店員さんおすすめの本 書評
- ・2月20日 「コトノネ」vol.37「どこにいても『当事者』になれなかった」(『ただ、そこにいる人たち』)
- ・3月30日 高知新聞 ちょっと心の洗濯を「存在すること 共に共感」
- ・3月31日 信濃毎日新聞(夕刊) ちょっと心の洗濯を 「『表現未満、』支える『共事者』」

■出演・登壇

2020年

- ・6月13日 静岡文化芸術大学 20周年記念シンポジウム登壇(久保田)
- ・7月18日 アクティブシニアネット「多様な人たちが暮らす社会」講演(久保田)
- ・9月25日 聖隷クリストファー大学「地域包括ケア看護論」登壇(久保田)
- ・11月11日 東京大学「スロージャーナリズム講座 -MOVE ON 2020-」(野澤和弘)「表現未満」という思想(久保田)
- ・11月12日 立教大学コミュニティデザイン学演習 22 文化政策論2(若林先生)ゲスト登壇(久保田)
- ・11月19日 自立生活声明文プロジェクト主催オンライン座談会第三回登壇(佐々木雄)
- ・11月20日 植松学園大学(野澤先生)講義出演(久保田)
- ・11月7、14、30日 静岡大学 NPO・ボランティア概論(日詰先生)連続講義(久保田)
- ・12月11日 名古屋造形大学地域社会圏領域オンラインレクチャーシリーズ「建築の隣人」山城大督氏との対談(久保田)

2021年

- ・2月18日 はじまりの美術館「cento-シエント-福祉と表現にまつわる研究会 2020」(佐々木雄・水越)
- ・1月29日 静岡文化芸術大学文化政策学部中村美帆教授授業出演(ムラキング・久保田)
- ・2月12日 秋田県社会福祉法人経済者協議会全国障害者施設経営委員会情報会講演(久保田)
- ・2月26日 20:00~22:00 下北沢本屋 B & B 主催『ただ、そこにいるひとたち』刊行記念オンライントークイベント 小松理虔氏・赤坂憲雄氏との対談(久保田)

■チラシ・フライヤー・事業報告書

どこでも！だれでも！雑多な音楽の祭典！
キミもスタ☆ダン!!Zに参加しよう！

参加方法
★スタ☆ダン!!スターキットを1つお申し込みください！
★スタ☆ダン!!スターキットが届いたら、やってみよう！
★スタ☆ダン!!スターキットが届いたら、やってみよう！
★スタ☆ダン!!スターキットが届いたら、やってみよう！

スタ☆ダン!!Z
スタ☆ダン!!スターキットが届いたら、やってみよう！

お問い合わせ
03-431-1335
03-431-1335

A Festival of Misc. Noise Collection for Anyone, Anywhere! You Too!

How to Join In
★ First, request your free BE A STAR! Starter Kit!
★ Once your BE A STAR! Starter Kit arrives, give it a try!
★ Send your BE A STAR! Video to the BE A STAR! Headquarters!
★ Watch everybody's BE A STAR! Videos on the BE A STAR! Website!
★ Maybe we'll have some kind of event! (Maybe not!)

BE A STAR! Starter Kit
Includes: BE A STAR! Starter Kit, BE A STAR! Starter Kit, BE A STAR! Starter Kit

BE A STAR! Starter Kit
Includes: BE A STAR! Starter Kit, BE A STAR! Starter Kit, BE A STAR! Starter Kit

どこでも！だれでも！雑多な音楽の祭典！
スタ☆ダン!!
スタ☆ダン!!スターキット

キミとつながるスタ☆ダン!!
スタ☆ダン!!スターキット

スタ☆ダン!!スターキット
スタ☆ダン!!スターキット

スタ☆ダン!!スターキット
スタ☆ダン!!スターキット

スタ☆ダン!!スターキット
スタ☆ダン!!スターキット

You can see your star and be a star, too!!
BE A STAR! Starter Kit

So What is BE A STAR! Anyway?
This is BE A STAR! in action!

Examples of how to use the BE A STAR! Starter Kit

Can YOU wear the fabulous BE A STAR! glasses?!

ただ、そこにいる人たち
小松原 隆史 著

ここに来ると、
なんだか楽しくなって、
「支援」ということが
窮屈に思える。

—— 鷺田浩一

文化祭ライブ 噴火屋2020

13:00 ~ 15:00
★ 忘れし文化センター連尺町

11.21, 12.5, 12.19, 1.23

11.21 (土) 12.5 (土) 12.19 (土) 1.23 (土)

11.21 (土) 12.5 (土) 12.19 (土) 1.23 (土)

忘れし文化センター連尺町

★ 忘れし文化センター連尺町

★ 忘れし文化センター連尺町

★ 忘れし文化センター連尺町

表現未満、文化祭2020

2020年11.7(土) ~ 2021年1.30(土)

表現未満、文化祭2020

表現未満

忘れし文化センター連尺町

文化祭はじまるよ!

「表現未満」に関する4人の研究者によるリサーチ報告書

忘れし文化センター連尺町

たけしと生活研究会

たけしと生活研究会

たけしと生活研究会

たけしと生活研究会

自立ってなに? 「頼りきり」をふっ飛ばせ

金銭事件、クワの匂いが別々

2020年 たけしと生活研究会トークシリーズ

2021年1月16日(土) 13:30-18:00

検証シンポジウム

ヘルパー事業所 アルス・ノヴァ ULTRA

はじめました!!

ヘルパー事業所